

## 退職記念講義

幕切れのせりふ——フランスが教えてくれたこと——

### La Dernière réplique

— France, ...tu m'as nourri longtemps du lait de ta mamelle —

奥村 功

過分の紹介をいただきました。教授会でいろいろ言うというのは、うるさがたということでしょう。小骨が多い。魚に例えるなら鱧のようなもんですね。自分が教師のはしくてしかないことは、わたし自身はよくわかっております。なんの仕事も、大きな役職もせずに長々と36年もこの経済学部で来たわけで、聞えのいい言葉で言えば「生涯一語学教師」。論文も思い出したように書くばかりです。まあエッセーくらいは書きますが、ちゃんとした論文を書かずにエッセーばかり書く教師をエセ教師と言うんですね。

老齢での引退について、フランス語におもしろい比喻表現があるのを紹介します。これは日本の娼捨伝説のように、年をとった人間を厄介払いするために、南洋の島では椰子の木に登らせ揺すって落したとされる風習を踏まえています。faire monter qn au cocotier「椰子の木に登らせる。(老人を)厄介ばらいにする」、また secouer le cocotier「椰子の木を揺する」というのがそれです。椰子の木をフランス語では cocotier (ココチエ) と言いますが、木の上で揺すられる老人は「心地ええ」とばかりは言っておられません。必死で木にしがみつきますが、それを s'accrocher [s'agripper, se cramponner] au cocotier「椰子の木にしがみつく。古くからの特権にしがみつく」というんですね。この講義のように晴れがましい席が設けられ、花束まで用意されるのとは大変なちがいです。

今日は気楽な思い出話をします。同僚の先生方も見えておられますが、学生諸君を主には念頭に、フランスと自分のかかわりをめぐって話します。ところで、「幕切れのせりふ」を同僚のひとりがかう覚えに「最後の捨てせりふ」とおっしゃっていましたが、べつに鮠の最後っ屁のようなことを言うつもりはありません。副題「フランスが教えてくれたこと」のフランス語題名は直訳せず、ちょっと気取って、16世紀の詩人デュベレーの有名な詩の一節を引きました。「フランスよ、……お前は胸の乳で長いあいだわたしを養ってくれた」というのです。フランス語では、国名フランスは女性名詞です。

この副題なら、なんでも話せるだろうと最初は考えたのですが、実はそう簡単でない。フランス語を勉強して、それが一生の仕事になったのだから、「フランスが教えてくれたこと」はあまりに明らかと言えなくはありませんが、さらにつっこんで、では、その「乳」の味は、たとえばイギリスの「乳」とどうちがうのか？ それがお前のものの考えかたをどう造ったか？ などと問われれば、答えは簡単には出せません。眉唾の文化論に入りこんでしまう恐れがあります。し

かも、おなじ相手をあつかっていても、なにを相手から受け取るかは、人によってさまざまで、結局のところ、以下の話は「わたしの場合」はこうだったというに過ぎません。

「幕切れのせりふ」とは、職場を辞めるにあたっての言葉ということか、あるいはフランスの芝居の話をするのかと思っておられる方もあるでしょう。まあ話の枕としてですが、芝居の話も最初の5分ほどに限りすることにいたします。「幕切れのせりふ」はもちろん芝居の一番最後のせりふのことで、これは当然作者が苦心して考えます。これをしくじっては、芝居は台無しです。それぞれの幕の終りも大事ですが、とりわけ最後の幕の終り、芝居の大団円はそうです。役者がこれを聞かせ、幕がするすると下りて喝采がおこる。日本なら、定式幕が引かれる。もっとも近頃は、西洋でも日本の新劇でも幕を使わない舞台が多く、その場合は照明が溶暗、フェイド・アウトします。しかし、やはり幕が音を立てて下って、舞台が眼からささげられる魅力にはかないません。

幕切れのせりふにくらべると、幕開きのせりふはさほど大事でない。西洋の芝居ではそれなりに工夫もあり、いかに手際よく客にその場の状況をわからせるかに作者の腕も問われます。モリエールの喜劇では召使などがでてきて、きびきびとせりふを交わします。しかし、日本のかぶき芝居などでは、いわゆる「仕出し」という端役が出てきて、おごなりのことを言って、ゆるゆると話が始まる。

幕切れの方は、逆に西洋よりも日本のかぶきや新派が冴えております。それも、いわゆる義太夫物より、江戸の世話物がそうです。幕切れのせりふで、ストンと落とす。義太夫物は最後に、役者も義太夫も三味線も車輪になって舞台を盛り上げるので、最後のせりふですぐ幕が降りるとは限らない。（十三代目左衛門の声色で）「悪い人でも舅は親。親父どん、許してくだんせーやー」と言ってから、まだしばらく芝居は続く。しかし、世話物では最後のせりふをきっかけにすぐ幕が閉じるのがふつうです。ことに柝というものが、かぶきでは大きな役割を果しており、これがいやが上にも気分を高めます。

最終講義というのに、いったいこれは何の話だ、と訝っておいででしょうが、芝居の話はほんの枕ですので、もうしばらくだけ付き合ってください。世話物にはいろいろ有名な幕切れのせりふがあります。「こいつあ、宗旨を（チョン）けえざあなるめえ」、「や、今光ったのは、ああ星が飛んだか」、「火の用心をさっしやい」……こういったのは、せりふを張ります。しかし、もっと軽く、見物の意表をつき、ひょいと終るものもあります。たとえば、『髪結新三』の永代橋川端の場。忠七が身投げをしようとするところへ、やってきた弥太郎源七がとどめる。そして、ふたりの渡りせりふになり、その場はおさまる。源七が「あこりや（チョン）、提灯の火を消すところだった」と、身をかがめて幕、というのはなかなか洒落ております。

フランスの芝居のなかでも、とりわけロマン派の演劇は幕切れが華麗です。たとえば、ヴィクトル・ユゴーの戯曲の代表作に『リュイ・プラス』という5幕の韻文劇がある。その荒筋を1分間で話しますと、リュイ・プラスという主人公の若者は、あるスペインの貴族に仕える下僕だったのです。この貴族が邪悪な男でして、スペイン王妃への恨みから、あるたくらみをいたします。リュイ・プラスが王妃を熱愛しているのを知り、貴族はこの召使の身分と名前を偽って、かれを宮廷に送りこみ王妃の寵愛を得させます。リュイ・プラスは大臣にまでなる。王妃がこのすばら

しい青年リュイ・ブラスに愛を感じたとき、貴族ドン・サリュストによって、かれの本当の身分が明かされます。リュイ・ブラスはかつての主人ドン・サリュストを殺害し、みずからは毒をあおって王妃に許しを乞う。王妃は彼の真心を知って、いまや死のうとするリュイ・ブラスに身を投げかけ、Ruy Blas!と、廷臣としての偽りの名ではなく、その本当の名で呼びかける。それに男は感謝をしてMerci!(ありがとう!)と言って息絶えるのが芝居の最後、幕切れのせりふなんです。こういう風に幕切れのせりふを大いにきわだたせた芝居がロマン派のものにはあります。

さて、余計な話が長引きました。立命館とわたしのかかわりの最初は、36年前、マルセーユの船のなかでした。日にちもちょうど今ごろ、12月18日。わたしは2年あまりのパリ生活を終え、大学院にもどるつもりで帰りの船に乗りこむところでした。そのころ、フランスへの留学生はふつう飛行機ではなく、インド洋航路の船で30日あまりかけて行きました。フランスのM.M.汽船が神戸、横浜とヨーロッパの間を毎月往復しておりまして、わたしが乗ったのは「ラオス号」という1万数千トンの船です。おもしろい偶然で、わたしは行きも帰りも同じラオス号2等の同じ2人部屋、同じベッドでした。キャビンに入っていくと、机の上に電報がおいてある。開くと、「立命館経済学部専任講師の話あり。諾否返待つ」といった文面でした。こういうのを渡りに舟と言うんでしょう。一生を決めたその電報を取っておけばよかったのですが、たぶんどこかへやっしまいました。停年までいることになるとは、そのとき思ってもみませんでしたから。

返事を打つにも、出港の時間が迫っている。そこで、マルセーユを出てから船の無線通信に打電を頼みました。Accept proposal with pleasure. 正しい英語かどうか知りませんが、英語の単語で4語。こうして幸運にも採用され、わたしは就職の苦労をまったくしておりません。申し訳ないような気がいたします。

この時代の古いフランスの話は今と落差があるので、若い人にはかえって興味があるでしょう。それは「フランスが教えてくれたこと」にもつながります。じっさい、20代の後半という時期にフランスへ行っていなかったら、本だけでフランスに接していたら、これだけフランスに養われたという気はしないでしょう。この最初のパリ暮らしはわずか2年あまりですが、これを除いては、わたしという人間はない、と思います。

しかし、フランス留学だけでなく、その前にも、その後教師になってからも、フランスから受けたものは多いと思います。まず、なぜフランスにはまったかを述べないといけません。ときに人に聞かれます。「なんでフランスをやらはったんですか？」自分で考えて、すぐに答が浮かぶわけではないのですが、まず戦後、昭和20年代の日本は万事アメリカ一辺倒であって、つむじまがりにはそれに逆らうのがいい気分だったということがあります。だいたい、今でこそぼくは若く見られますが、本当に若い時分は「老成している」とかオールド・ファンなどと言われた。年寄りが大好きで、相撲でも野球でも歌手やかぶき役者でも、好きなのは今はやりの人間ではなく、とうの昔に死んだ人間か、現役でも老巧老練と言われる、引退直前の人間ばかりでした。例を挙げますと、かぶきでは、田圃の太夫といわれた四代目の沢村源之助(亡くなったのは昭和11年。ぼくの生れた年で、もちろんSPレコードでしか知りません)、歌手では浅草オペラの田谷力三、映画女優ではアルレッティ、野球ではへそ伝、坪内、御園生といった人です。

年寄り好きとフランスがどう結びつくかということですが、当時のアメリカ映画は若い人間ば

かりが出てくる他愛のない恋愛映画か西部劇でしたが（と、自分で決めていた。ヨーロッパ人ですが、ルビッチもヒッチコックもアメリカで作っていたのですけれども）、フランス映画はちがった。主演は若い男女でも、中年、老人も顔を出す。『巴里祭』、『北ホテル』、『恐怖の報酬』などなど…、『旅路の果て』という、老人ばかりが出てくる名画もあります。つまり、人生を複眼で見ている、人生の濃い味があるということでしょう。

フランス映画は1930年代、40年代の名作を高校、大学時代に京都で、ときには大阪神戸に出かけ、あらかた見ました。のちにパリのシネマテークなどでも見ましたが……。当時は同時代の映画よりも、戦前の映画のほうが数多く上映されたのではないのでしょうか？ その映画には、なんとも言えぬ豊熟した、他国の映画にはない香りがあり、文学作品よりもじかに、強く動かされたと思います。やはり20世紀の映画史では最高の作品群をフランス映画は作ったと思います。自分自身の好みでは、ルネ・クレールの作品にいちばんフランス風というか、すくなくともパリ風の感覚、仕上がりよさを感じます。

映画だけでなく、もちろんフランス文学も思想も絵画もひっくるめて、フランス文化は魅力的な存在でした。文学好きはたいていフランス、でなければロシアひいきでした。戦後の流行思想であった実存主義が、日本人の思想にどれほどの痕跡を残したかはわかりませんが、これも昭和20年代の大きな話題でした。今日、クラシック音楽は別として、フランスの大衆音楽は日本ではほとんど話題にならないと思います。しかし、1950年代の日本では、いわゆるシャンソンは、戦前のものもあわせ、ジャズやラテン音楽と並んで聞かれ歌われていました。その世代の女性が、昔歌った曲をいまカルチャー・センターのシャンソン教室でおさらえしているのでしょうか。京都にも「フレンチ・カンカン」というシャンソン喫茶がありました。

高校時代を、わたしは京都の人間ですので、二条城の西にある府立朱雀高校で過ごしましたが、そのころジャーナリズムでさかんに文筆活動をしておられた京大人文科学研究所の桑原武夫先生の評論を読みはじめました。著作はすべて耽読し、絶版で本屋に見当たらない本はご自宅に手紙でおねがいし送ってもらったりしました。明快で歯切れのよい論理が魅力で、そこに「フランス的なもの」があるように感じました。学校の文芸サークルに籍をおいていましたので、学校の文化祭でやった「石川啄木展」の展示のために啄木関係の本を拝借にいたり、サークルで企画した講演会の講師として高校に来ていただいたこともあります。あちこちで講演をやられましたから、よく聞きにもゆきました。一種のおっかけですなあ。

それから、京大仏文科の伊吹武彦先生も俗にいうタレント教授のおひとりで、よくテレビに出ておられました。これは余談ですが、「しゃぶしゃぶ」という料理は京都のある店が始め、粹人であった伊吹教授の命名だと、京都の古い食べ物案内に出ております。伊吹先生はラジオの新日本放送、のちの毎日放送で週1回夜遅く、「歌うフランス語」という番組を長年やっておられました。シャンソンや歌曲、民謡などを教材にしたフランス語講座で、わたしも京大に入る前から毎回聞いていました。番組はあまりフランス語の勉強にはならないのですが、伊吹流の名解説がついて歌を覚えるのが楽しみで、これで聴いた曲はいまでもうろ覚えで歌えます。以前、私が『やさしい詩とシャンソン』という小さな教科書を出したことがあります。そのフランス語題名にはこの番組のもの、すなわち *le français en chantant* を拝借しました。

こうして京大仏文科につながるのですが、そこまでのいきさつは省きます。仏文科の主任教授は伊吹先生ですが、学内の他の部署からも兼任担当で授業に見えていました。教養部から生島遼一先生ほか数人の方々、人文科学研究所から桑原武夫先生です。いま名前を挙げた3人の方々は当時50代でしたが、世間的にも知名の大先生で「京大仏文の三羽鳥」などと呼ばれておられた。なかでは、3先生などとも言うていました。3先生とも、戦前に留学されています。すこしく素描を試みますと、

伊吹先生の講義は人を魅するものがありました。ああいう、形とことばの美しさのある名講義をほかに聞いたことはありません。これは授業に列なっただれもが言うことです。ことばを選んだ、水ももらさぬ鮮やかな話ぶりでした。

なにかを論ずる体の「講義」よりも、文章や詩をあつかう講読が先生の本領でした。まず、フランス語の朗読がすばらしい。ついで、内容の吟味が巧みで語学的にもゆきとどいている。さらに、日本語の翻訳がみごとです。ポール・ヴァレリーの『若きパルク』、あるいはフランス詩選などの授業を思いおこします。そのほか、京大の向いの関西日仏学館でも仏文和訳の授業をやっておられて、これもずいぶんよい勉強になりました。文章を書くにはいい文章に触れないといけません、講義のやりかたも、いい見本に触れないことにはわからないと思います。ところが、文章の見本は求める気さえあればどこでも得られますが、講義を聞く相手となると限られます。

生島先生は小説を読んで倦むことを知らず、耽読する方でした。話の細部が、努力によってではなく、自然に記憶に残る人です。広い内容の講義をいくつも担当されていて、ぞくぞく繰りてくる博大な知識がわれわれには驚きでした。見るからに貴い感じのする顔立ち、風采です。能をひんばんに演じられ、和洋の美術にも詳しい審美家で、芸術的気質の方であったと思います。教師生活を退かれてから多くのエッセー集を書かれ、その仕事で芸術院賞を受けられた。一代の文章家でした。ご自分の気に染まない決まりことばは決して使われない。筆がすべるということは決してなく、抑制を十分にきかせて、心のひだを伝える高雅な文章を書かれました。晩年病気をされたのですが、たまたまわたしも同じ病気を同じ小さな病院で手術するという偶然がありまして、同病相憐れむ、よくお訪ねしました。そんな縁でか、先生の歿後、わたしは京大文学部の同窓会誌からの依頼で追悼の文を書かせていただきました。これは生涯で自分がえられた幸せのひとつだと思っています。

桑原先生の講義の魅力は闊達な即興のおもしろさです。授業にはさまれた挿話をいくつか紹介します。先生は、仏文の学生が日本の文学や映画に無関心なのをいつもたしなめておられたが、例え話で「健康な人間なら、女が好きやったら、西洋でも日本でもええはずでっせ。女は西洋に限ります、なんちゅうのは、あんた、変態性欲でっせ」。また、仏文学を盲目的に研究して、批評の目をもたない傾向について、「ヴァレリーを勉強してるんやったら、ヴァレリーさんに会った時に、知らん顔されんように、やあ……君、このごろどうですか、ぐらい声かけてもらうようでないとおきませんで」。さらに、自分の頭で考えない日本人の弱さを笑われて、「有名な社会学者清水幾太郎の説によれば、などと国際会議で外国人に言う馬鹿がいる。自分はどう思うのかと言えないでどうする」。

こういう話を聞いたのは40年ほど前なのですが、せいぜい数年前のようにしか思えません。こうした警拔な指摘の感化にあずかったのはありがたいことです。フランスを学ぶといっても、い

ろいろな手引がなければ駄目で、わたしの場合すばらしい手引にめぐまれたと感じます。こうした先生方を見ることによって、先生方を通じて、わたしはフランスがもつ魅力を見ていたと思います。

フランス語を学び、フランス語で書かれたものを読むうちに、わたしはおのずとフランス語のものの言いと、日本語でのものの言いの中のさまざまなちがいに敏感になっていきました。ことにフランス語で文章を書くことは、だれにとっても、たいへんな勉強になります。いわゆる翻訳調の文章、ヨーロッパ語を縦に書いたような日本語を毛嫌いするようになりました。

たとえば、桑原先生もよく言われたことですが、哲学のことはフランス語では日常語と同じものが使われるのに、日本語ではそうでない漢語に言い換えることになっている。また、翻訳の文体がいわば痩せほそった日本語であるために、原文の表現の角々が削ぎ落とされて、感興が失われる。つまり、原文がもつ奥行と幅をあらわすのに、おなじだけの日本語が（あるにもかかわらず）翻訳では動員されていないということも感じました。

さらに、うわべの語義をたどるだけではわかったことにならないのはもちろんです。さきに日仏学館で伊吹先生の仏文和訳の授業に出た話をしましたが、例えばそこでジロドゥーの戯曲『トロイ戦争は起らないだろう』が扱われました。そのなかに、戦場における死の空しさを語るエクートル（ルイ・ジューヴェが演じました）の長い演説があつて、それはふたつの言葉「（陽射しの）暑さ」と「（地中海の紺碧の）空」という名詞で終わっている。死者がもう感ずることも見ることもできないものです。このふたつの語が演説の最後におかれていることによって、死者が失ったものが強く印象づけられる、そういう効果がねらわれている。ところが、翻訳では、関係代名詞の節を下から訳すものですから、原文の息づかいも、また文章全体がなにを言おうとしているのかもわからなくなる、と伊吹先生はおっしゃる。

このことをすこし理屈だてて言うとするれば、ことばがもつ内容、いいかえれば情報のなかには、そのことばをどういう順序で伝えるかも、当然のことながら、含まれる。また、人間はことばを、数式に置き換えられるような論理的側面と、音の集まりとしての感覚的側面とのまじったものとして用いている、ということでもあります。

ことばの息づかい、あるいはリズムと呼びうるものは、「おもい」が「ことば」になる過程を映しており、それはことばの内容と切り離せないものでしょう。言いかえれば、ものを考え、それを言葉にするいとなみは人間の生理に則したものはずです。たとえば、パスカルのパンセに「読みかたが早すぎても、おそすぎても何も理解できない」とありますが、人の書いたものを理解するにしても、自分に適当な速度でしかできない。人になにかを伝えるときも、相手が考える速度と型に合ったものでなければならぬ。自分がことばを発するときも、自分の身体を経て出てくることばで語らねばならぬ。不消化なことば、決まりことば、自分が納得していないことば、これらは、別の表現をすれば「腑に落ちない」ことばだと思ふのです。

もうひとつ、ことばをその芯において用いるということも、やはりフランス語を学ぼうちに教えられました。たとえば、ポール・ヴァレリーは詩を作るときに、よくフランス語の単語をその本来の意味、つまりラテン語での意味で用います。このように、ことばをできるだけ動かない形で用いれば、思考の軸も定まります。ヴァレリーの詩「海辺の墓地」などを読むと、それを実感します。

石川淳という作家がいました。この人の作品、とりわけエッセーを好んで読みました。この人が珍しく京都で講演をしたことがあり、これにはもちろん出かけました。生粋の江戸のお人ですから、作には古い江戸の町ことばが出てくる。おたな、しばや、それによく「いくさ」ということばを使います。世の中の様子は変転しても、ことばそれにあわせて変えていく義理はない。戦争といい、いくさといい、同じものですから、古くからのことばで済ませてかまわない道理です。石川淳という人は戦争中に作家として出発したわけですが、「いくさ」ということばで同時代をつきはなしていたと言えます。

フランス語で透明な文体（style transparent）と言われるものがあります。これは文章がまるで透明な水のように、そこにあるのを感じさせずに、筆者の言うことが読み手にそのまま伝わる文体を指すと思われます。つまり、筆者の「おもい」が「ことば」に移る際に（固いもの言いをすれば、「思考」が「表現」になる際に）、一番近い道を通る。そのために、読み手がいとも簡単に書かれた内容、書き手のメッセージがわかるのだ、と言えましょう。透明な文体と言え、近代日本文学ではまず堀辰雄などの文章が代表に挙げられるでしょう。透明な文はすなわちいい文だ、と言って間違いでないでしょうが、逆に、いい文はすべて透明な文かと言うと、そうとは限らない。たとえば、表現の技巧が目につく文、あるいは簡潔に書こうという意志の感じられる文は、そこに文章のあることが明らかで、透明な文体とは言えませんが、いい文、名文と評価されることはある。たとえば、漱石の『草枕』『虞美人草』や、鷗外や鏡花の文業。さきほど名を挙げた石川淳の文章もそうです。

日本語の透明な文体といえ、それはできるだけ和語、やまとことばを使ったやわらかな文といえましょう。つまり、日本語でものを考えるとき、脳裏にはじめに出てくる「おもい」、言語学ではこれを内言というようですが、これはやまとことばに近いと思われるのだけれど、それに形を与えるあいだにだんだん固い漢語に置き換わってしまう。たとえば、よく「感動した」などと言います。しかし、わたしはこのことばに馴染めない。ウソだと思ってしまう。「感動」した気持は、「感動」ということばでは表せないはずだ。「もの感じて」とか、「心動かされて」とか、「胸を衝かれて」とか、言いようはあるのではないか。そのように、「おもい」に添った「ことば」を選ぶ、「おもい」から「ことば」へのあわいを縮めることが大事だろうと思うのです。

といったことを、フランス語を学んでいるうちに考えました。もちろん、日本語の語彙に和語と漢語、ふたつの流れがあって、それが日本語の豊かさをなしていることは承知しています。日本人の歩んだ歴史のなかで漢語が取り入れられたわけで、和語では事足りなかったからこそです。しかし、問題は、漢語なしにはすまない以上に、漢語、さらにはカタカナことばに言い換える癖が現在の日本語にはあることです。実感をともなった和語とちがって、内容のないことばをいとも無造作に使ってしまう。

たとえば、あるとき魚の産地直送の車が来て、こうマイクで言いました。「只今から、広場にて鮮魚を販売いたします」。これを、向き合った人に言う場合は「これから広場で魚を売ります」となります。マイクで言うから、公という感じがして漢語に言い換える。「肉体疲労時の栄養補給に」、こういうコマーシャルはまったく美しさのないことばです。ただ、「疲れたときに」とだけ言えば、ひびきは美しく、必要な情報は伝わっているのです。「挑戦」ということばも濫用されています。立命館にもこの手のことばはあります。「全学の英知を結集して」。こういうちょっ

と恥ずかしくなる勇ましい文句はやめて、「みんなで知恵をだしあって」と言えばどうでしょう。こういう風に、ことばを使うときに、ひとつひとつ吟味して、空の音が出ないかコンコンコンと叩いてみて、使うということ。

これはべつに外国語に触れなくとも、日本語を使うときに心すればできるはずですが、わたしの場合は、フランス語という回路を通してそう考えるようになった。たしか物言いはどうあるべきかを考えつめていくと、簡単にものが言えなくなり、ちょっと失語症のようになるわけですが、これが日本語だけの世界に住んでいれば、なかなかそこまで突きつめないのではないのでしょうか？

こう申し上げますと、なかには、大事なものは論理で、用語ではないとおっしゃる方があるかも知れない。しかし、いきなり論理に辿りつくわけにはいきません。やはり、論理の材料となることばをまずしっかり吟味し、確かなことばをきっちり扱えば、空論は退けられ、人はおのずと論理に導かれると思います。

さて、大学院の修士課程を出るとともに、フランス政府給費留学生の試験に合格しましたので、63年の9月にフランスへ出発します。そのころ、観光旅行はできなかった、ということがまず若い世代には解らないでしょう。日本はまだ外貨のゆとりがなかった。外国へ出るには公務とか留学とかの理由が要り、小遣いとして持ち出せる外貨の枠は一般には200ドルだった。当時の為替は固定相場で、1ドル360円。 $200 \times 360 = 72,000$ 円までしか外貨に換金できない。もっとも、当時の大学卒の初任給は2万円以下でしょうから、そこそこの額ではありますが。この枠外の円を持ち出すのは違法ですが、それをやれば、国外での円の実勢による交換だから1ドル400円ほど払わねばならない。

つまり、まだ日本は経済大国ではなかった。高度成長の時期に入っていて、トランジスター・ラジオ、カメラ、時計などは輸出していたけれど、自動車のような大型工業製品はまだヨーロッパ市場に出回ってはいなかった。いまはヨーロッパのどこへいっても物価は日本より安い感じがしますが、その時分は逆でした。

スエズ経由で1月あまりの船旅になります。これがフランス生活のいい予行演習です。いまの若者はスペイン料理でもイタリアの菓子の名でも知っていますが、当時はそんな常識はない。洋食というのを時に食べるくらいのもの。腰掛式の便器も初体験です。フランス料理のコース、ぶどう酒チーズというものの学習をいたします。なんだか、幕末の渡航記のような気がなされるかも知れませんが……。ほくだけのことでなく、それが一般でした。

船旅の終り近く、ポートサイドから濃紺の地中海へ出たころだったと思いますが、昼食の席でフランス人の船客が、シャンソンの女王エディット・ピアフが亡くなったと驚いて話している。詩人のジャン・コクトーも亡くなった、と。ピアフとコクトーは友人で、ピアフの訃報を聞き、そのショックでコクトーは亡くなったのです。船の無線室に入る情報で、簡単な新聞が数日おきに貼りだされるわけです。もちろん、ピアフの名前は聞いていましたが、それほどの歌手とは知らなかった。数日後パリに着いたときには、ピアフの葬儀は済んでいましたが、これは語り草になるほどの葬儀で、たいへんな数のファンが葬列につきしたがったと言います。いまでも、パリのペール・ラシェーズの墓地のピアフの墓には花が絶えません。



だれもがする「洋行」の話をしても仕方がない。一概に欧米ではなく、フランスに即して話をしないとイケない。わたしが見たフランスは63年から65年ですから、比較的落ち着いた時期のフランスです。つまり、アルジェリア戦争が62年に終わったあとで、68年のいわゆる5月革命と呼ばれる騒乱の前の時期です。

アルジェリア戦争の時期にフランスへいった人の話を聞くと、アルジェリア反乱軍、つまりフランスからのアルジェリア独立に反対するフランス右翼勢力の爆弾テロが頻発してパリは騒然としていたようです。フランスも先が見えない戦争の最中ですから、留学生の給費期間の延長もなかなか認められなかった。

62年にアルジェリア戦争が終り、じつに132年におよぶ植民地支配からの独立となります。フランスも数年間は落ちつきをとりもどします。しかし、大学へ出かけてみると、パリ大学はとんでもない状態です。10万人ほど学生がいて教室に入りきれない、階段教室の教壇の上にも、先生をかこみ学生が座りこんで授業を受けている。こういう大学教育への恒常的不満がやはり数年後に「学生の反乱」として爆発し、それがきっかけになって「68年5月」と言われる騒乱になる。ド・ゴール大統領失脚の一手手前までゆきます。この若者の反乱は世界的にひろがり、いわゆる大学紛争が世界中に荒れ狂いはじめる。日本でも同じ年に紛争がひろがり、立命館でそれが始まったのは、ちなみに68年12月のことです。

もうひとつ、わたしがフランスに着いた時期で述べておいていいのは、そのすこし前からパリの建物の外壁が洗われ始めたことです。これは、ド・ゴール大統領時代の文化大臣を勤めた作家アンドレ・マルローの提唱でおこなわれたのですが、長年の汚れで真っ黒であった建物の外壁がまず公共の建物から洗い始められ、だんだんにもとの白さというか、乳白色の石の色を取りもどした。それはついで民間の住居にひろがり（もちろん、パリの住宅のほとんどがいわゆる集合住宅ですが）、さらに後には、ノートルダムのように古色が当然と思われた中世建築にまで及んだ。どこへ行っても、壁に足場を組み水と旋盤で汚れを落とす作業が見られ、これでパリが白い姿をあらわすのは、ほくのような外国人にかぎらず、フランス人にとっても驚きだった。

着いてすぐは、パリのほとんどが真っ黒だった。ひと気の少ない大きな広場、たとえばパンテオンや、サン・シュルピスの広場、あるいは株式取引所はまるで19世紀の写真に見るような重厚なおもむき、そして重圧感があった。その風景がだんだん白く軽やかになり、フランス人にとっても見慣れた建物を新しい眼で見直すことになる。それを文化大臣マルローは望んだのでしょう。建物だけでなく、人の服装も黒でした。老年の女性はたいていが黒の服をきていました。古い映画でおばあさん役となるとシルヴィという役者が一手専売の時期がありましたが、あの真っ黒の服です。ソルボンヌの先生方もほとんどがそうでした。その黒の背景のなかで余計に鮮やかな色がひきたつ、そんな感じがありました。

ここで考えるのは、どの土地もそれぞれの時代で印象がずいぶん変わる、ということ。町の雰囲気にしても、わずかな時間のずれ、あるいは季節のちがいで異なって見える、ということです。したがって、滞在者のさまざまな感想も、そうしたものとして割り引いて受け取る、こちたの物言いをすれば相対化する必要があるということになりましょう。たとえば、夏にヨーロッパを旅行する日本人が多いのですが、ヨーロッパの都市が日本の町と一番違って見える季節、その

魅力がもっともよく現れる季節はやはり冬でしょう。

だれにしても、滞在の印象はその時期に大きく影響される。よく知られた本ですが、詩人のアンリ・ミショーが1933年に発表した紀行文で『アジアにおける一野蛮人』というのがあります。その日本についての章は、まことに激越。日本をこてんぱんに批評しています。わたしは現代でもあてはまるところがある卓越した観察だと思っていますが、しかし著者自身はのちの版で、「再読して仰天した」と述べ、「時代の空気」のせいだろうと弁解しています。たしかに、時代が異なれば印象もがらりと異なりうるでしょう。

パリのあちこちの街区の様子も今とはかなり異なります。19世紀パリ第一の盛り場はグラン・ブールヴァールと呼ばれる大通りでした。印象派の絵によく描かれております。1960年代には、もちろんシャンゼリゼーが一番の繁華の地ですが、グラン・ブールヴァールにもまだ盛り場の風情がありました。いわゆるブールヴァール演劇と呼ばれる軽い喜劇を見せる劇場街ですので、わたしはパリに着いてすぐここを歩いた。しかし、現在では（オペラ座をすこし東へ離れると）もうすっかり場末の感じになってしまいます。先年パリである日本人留学生、長くパリにいる人でしたが、と雑談をしていて、グラン・ブールヴァールと言ったときに、「それ、どこですか」と聞き返されて驚いたことがあります。

逆に当時さびれていて今にぎわっているところもあります。パッサージュや、マレ地区がそうです。パッサージュはいま商業面で活気づいているし、都市論からも関心を持たれていますが、当時一般には時代遅れでどうにもならぬ代物と見られていた。由緒ある邸宅街のマレ地区にしても、観光客がおおぜい集まるようになったのは、70年代に集中的な改修を経てからのことでしょう。

さて、5月革命のあとフランスでは、政府が大学制度の大改革にのりだし、たとえばパリ大学は13の大学に分かたれ、多くはパリ周辺部に移されます。この68年5月という事件は、20世紀後半のフランスにとって、たいへん大きな転換点をなすものです。たんに大学教育の制度改革にとどまらず、フランス社会の根幹をゆるがしたと言えます。簡単に言うと、それ以前の、規則でがんじがらめに中央から管理した社会から、個々人や組織の自発性を重んじた柔構造の社会へと、原理が移ったということでしょう。

この68年5月の前後で、すべてが変わったというのは事実でしょう。それ以後は、フランスはたしかに、より寛容で若々しい国になったと思いますが、年配の人のなかには「あれ以来、万事悪くなった」と言う人もあります。わたしも学生時代のあと、何度か出かけるたびに、人々がより外に開かれ、傲慢でなくなったと感ずる一方、生活が安直になったというか、フランス的な生活様式が薄れたのを惜しむ気持ちを抑えかねるのです。

現在の若い日本人にとっては、ヨーロッパやアメリカは観光や観察の対象であっても、もはや近代社会のモデルとして学習の対象にしているわけではないでしょう。それは日本が経済大国になり、都市の外観もそれなりに整った結果、違いがそう目につかなくなったからです。

しかし、30数年前はそうではなかった。日本に下水道はないに等しかった。大都市の大通りにも歩道は少なかった。滑稽なようですが、欧米にすべてを学んで近代化で追いつくことが第一の

前提、と明治時代とおなじようにみんなが考えていた。追いつくとか、追い越すとか言うのは、文化文明はひとつの道を一直線に進むという前提で考えているかのようですが、もちろん問題はそう簡単ではない。経済の指標で比べれば、日本はいまやかなりの点でヨーロッパを凌いでいるようだが、生活のゆとりで比べればどうか？ 伊吹先生のことばを思い出します。「セヌ河の岸を歩いている人を見ると、こんなにゆっくり歩けるかというくらい、ゆっくり歩いていますなあ」。実際、ああいう悠然たる逍遙の姿が見られるところは、ヨーロッパを除けば世界にあまりないでしょう。

「フランス四十の富」(*Les quarante trésors de France*)という大幅の油絵があります。パリの市立近代美術館の所蔵で、パリで活躍した日本人画家フジタ76歳の作です。これはフランスで人生の大半を送ったフジタが生涯の終りにフランスに捧げた讃歌と言ってよいでしょう。フランスが世界に誇るもの40を挙げ、それらを細かく描いております。シャンパン、牡蠣、チーズ、ぶどう酒、レース、絹、人形、フォワグラといった特産品、あるいは美術、骨董趣味、アカデミー・フランセーズといった学芸に関わるものなどですが、それらすべてにおいてフランスが世界最高かどうかはともかく、フランスは優れた独自のものを多く生み出してきたことは疑いがない。

フランスで暮らすということは、フランス文明の中身をなす、そうしたさまざまなものの感化を受けることですが、話をあまり広げすぎないように、ここでは、目には見えず絵になりにくい、フランス語教師のわたしにとって近しい話題である、フランス人のことばづかいに話をしぼることといたします。シャンパンやトリュフを日本でつくりだせないのは仕方ありませんが、ことばを扱う態度はフランスに見習うことができる。そして、これは社会の大問題であるはずで、ところが、ことばづかいの違いは、やはりかなり長い期間、相手のことばにつきあわないとわからない。また、それはものの考えかたには関わりますが、べつに人の外面にあらわれるわけでもない。

フランス人のことばづかいの根本には、論理が第一だという考えがあります。C'est logique. (「論理的だ」とフランス人が言えば、納得するしかないと言っているのと同義です。日本であれば、「論理的だ」のあとに、「しかし……」がつづいて、結局は論理の重視とはべつの結論に終ることが多いのですが……。フランスでは論理の尊重と個人主義は表裏をなして、つまり人はそれぞれ別物だから、他人に話すのは対話をはらんでいて、論理で相手を動かさなければいけない、ということになる。自分の拠って立つ論理を突きつめていくことによって、他人の動きに流されず、論理にしたがえばこうなるという判断ができるようになる。こうしたお話は、ヨーロッパへ行く前にもよく聞かされているわけですが、それが自分の腑に落ちるのはやはり実際そこに暮してからです。

それがとくによく理解できるのは、日本人を、フランス（に限らないのですが）、べつの国という鏡に映したときです。日本人が持つ美点欠点、奇妙なところ、独特なところが、他人の眼を意識することによって、よくあぶりだされる。たとえば、フランス人の観客にまじって日本映画を見ると……フランス語の字幕を見ている、いろいろ考えさせられる。映画によっては実によくできた字幕がついており（たとえば、小津安二郎の『彼岸花』）、日本語のせりふにない語句がフランス語で添えられて、お客の理解を助けている。この添えられた語句がすなわち、ふたつの言語の文化的なずれを示しているわけです。

日本人学者の講演を聞く機会もいくどかありました。たいていの場合、日本人の話下手を痛感するはめになります。構成がない。まずひととおり聞いて、論旨は自分で考えてください、と言うかのごとき、垂れ流しの無頓着な話しかたです。結局、自分の話題のひとつひとつが外国人にどう受けとめられるかが突きつめて考えられていない。こういう話しかたを見ると、反対にフランス語での表現は対話の精神に拠っていることがよく納得されます。講演はひとりでしゃべるのですが、じつは聞き手との対話です。一語一語聞き手の反応を瀬踏みしながら、フランス人はしゃべる。この態度が大本にありますので、書くときも読み手を念頭に置いて、できるだけわかりやすい順序に整理して書く。辞書の孫引きで言うのですが、アンドレ・ジッドのことばに「古典主義は手短かに言うことを専一に心がける」というのがあります。「古典主義は」と言っていますが、「フランス文学は」と言いかえて問題はありませぬ。「手短かに」というのは、「よく整理して、相手に余計な負担をかけないように」ということです。

フランス人の講演がどれも面白いというはずはないのですが、水準は高いと言っていいでしょう。ただ論旨が明快というだけでなく、ことばを吟味して話すことが求められる。フランス人にとって講演は、芝居もそうなのですが、ことばを聞く楽しみを味あわせてくれる場ということなんです。ふだんと違う飾ったことば、華麗な修辞に触れる機会です。日本ではどうでしょうか、内容が有益であることは求められますが、ことばを選んで話すことは必須要件ではなさそうです。講演でことばに酔う喜びをフランス人は知っていますが、残念ながら日本にはない楽しみだと言うしかない。日本でフランス語の講演を生で聞く機会は限られます。翻訳で中断されると、味わいは失せます。幸い日本仏文学会の大会などでは、フランスから派遣された知名な文学者の講演があります。近年では、有名な哲学者ミッシェル・セール（Michel Serres）の講演などは含蓄と修辞、実も花もそなわり、陶然と聞き惚れさせる、じつに結構なものでした。

フランス人にとって講演と芝居は、ことばを味わうという点では共通していると申しました。留学生として着いてみると、ラジオではマダム・シモーヌ（Madame Simone）の diction（せりふ術）の時間が土曜日の午後にあるのです。この人は20世紀初頭から舞台の花形で、のちに舞台を退いて女流作家としても名をはせた人です。その名物番組のことは伊吹先生から話は聞かされてきました。その後じつに30年以上経ってなお、おなじ番組が生きているのです。コンセルヴァトワール（国立演劇学校）の若い生徒のひとりに古典劇の一節を読ませて、せりふのめりはりを指導いたします。1877年生れですから、そのころでもう80代後半、声はすこししゃがれておりましたが……。マダム・シモーヌが亡くなったのは1985年で、ときに108歳でした。

劇場中継にしても、日本ではテレビジョンが始まってからも、ラジオでしばらくはやっていましたが、今日ではもう考えられないことです。フランスでは現在はどうか知らないのですが、84年に行ったとき、コメディ・フランセーズのマチネの『ベレニス』（主演リュドミラ・ミカエル）を録音でなく、当日の中継で全幕聞かせていたのには感心しました。テレビジョンがあるのに、なぜラジオで？ といふかられるかも知れませんが、フランスの芝居、ことに古典劇は、まあそれでもおよそ事が済むんですね。大事なことはせりふで尽きていますから、舞台の動きの解説もほとんどいらぬ。しかし、日本の芝居はそうはまいません。亡くなった劇評家の戸板康二さんが、先代吉右衛門の『盛綱』のラジオでの舞台中継の話を書いておりましたが、首実検ではまったくせりふなしに数分が経過してしまい、しかもそこが芝居の肝心の場面なんです。

だれでもすこし外国生活に馴染んで帰ってくると、こんどは日本語に対して、外国語のように自分からの距離を感じ始める。発声、ことばづかひのあいまいさに嫌気を覚える。使われることばが早々と入替わる社会の底の浅さに疑問を覚える。そうした結果、自然に音づかひ、語彙の選択などに気をを使うようになる。教師をやるようになってから、ことに発声には気をつけるようになりました。教え始めたころは、「早口だ」、「聞きとりにくい」と、ときに学生に言われました。いまは一音一音、つまり子音も母音も、ということですが、相手に聞き取れるようにというつもりで、ふだんから話しています。

よくフランス人は articuler 「はっきり発音」することを求めます。日本語をフランス語風に発音はできませんが、日本語でも「はっきり発音する」ことが大事だと思います。わたしについて言えば、教室でフランス語を教えるあいだに、学生にどうフランス語らしい音を出させるかという苦勞を通じて、日本人の発音習慣そのものを考えなおすようになった、と言うことができます。長々と話してきましたが、やはりフランス語に触れ、それを教えたことの結果として、日本語についても、ことばづかひすべてにわたってきっちり考えるようになったと思います。その程度のことか、と言われればそれまでなのですが……。

自分の「おもい」に添ったことばを選ぶことを説いた詩を一篇朗読いたします。ヴェルレーヌの、「詩法」と題するよく知られた詩です（ただし、すこし長いので、途中の第5、6、7節をはぶきます）。若い詩人に詩の書きかたを教える体で書かれております。ヴェルレーヌに近い、ほかの詩人にも、このように詩についての考えを詩にした有名な作品があります。すなわち、ボードレルの「万物照応」と、ランボオの「母音」です。

ところで、フランスの詩は多くが一行12音綴で書かれています。その場合、真ん中に語群の切れ目があるのがふつうで、一行は6音綴二つに分れ、詩は全体として6音の規則的なくりかえしになります。しかし、ヴェルレーヌがこの詩で勸めているのは「奇数脚」、つまりおなじ長さに分けられない詩行で、この詩そのものが9音綴で書かれています。この場合、詩行はふつう4+5、あるいは5+4に分れ、等分できません。この不規則な形こそが、（いわば、張り扇が間に入るように調子のついた）12音綴とちがって、心のひだにしたがう、微妙な表現を引きだすというわけです。

## ART POETIQUE

## 詩法

A Charles Morice.

De la musique avant toute chose,  
Et pour cela préfère l'Impair  
Plus vague et plus soluble dans l'air,  
Sans rien en lui qui pèse ou qui pose.

Il faut aussi que tu n'aïlles point  
Choisir tes mots sans quelque méprise :

シャルル・モリスに

なによりもまず 音の調べを。  
そのためにこそ奇数脚を。  
おぼろで 虚空に溶け  
あとをとどめぬ詩句をこそ。

また 漠ならぬことばは  
さだめて選むなかれ。

Rien de plus cher que la chanson grise Où l'Indécis au Précis se joint.	ぼかしと線のまじりあう 薄墨の歌にまさるものなし。
C'est des beaux yeux derrière des voiles, C'est le grand jour tremblant de midi, C'est, par un ciel d'automne attiédi, Le bleu fouillis des claires étoiles!	それは面紗に隠るうるわしき瞳, それは真昼のゆらめく陽射し, それはうす冷えの秋空に 星きらら群れいる青さ!
Car nous voulons la Nuance encor, Pas la Couleur, rien que la nuance! Oh! la nuance seule fiancée Le rêve au rêve et la flûte au cor!	しかり, 求むるはつねに「陰翳」。 「色」にあらずして ただ色合い! ああ, 色合いこそがすべてを妻あわす, 夢を夢に, 横笛をホルンに!
De la musique encore et toujours! Que ton vers soit la chose envolée Qu'on sent qui fuit d'une âme en allée Vers d'autres cieux à d'autres amours.	音の調べを ひたすらに どこまでも! 汝が詩句には 翼こそあれ。 まだ知らぬ恋の待つ, まだ知らぬ天地へと 魂を去り翔けるがごとく。
Que ton vers soit la bonne aventure Eparse au vent crispé du matin Qui va fleurant la menthe et le thym... Et tout le reste est littérature.	汝が詩句は気ままに漂え, 肌を刺す朝風のなか 薄荷, タイムの香にくゆりつつ... あとはただ 言の葉のぬけがら。

Paul Verlaine, *Jadis et naguère*.

ポール・ヴェルレーヌ『昔と近ごろ』

(試訳 奥村)

人には風情が欲しいように、ことばには香りが欲しい。もっとも、保険の約款の文章に香りはむつかしいでしょうが、しかし、すくなくとも人の口から発せられることばには香りがあらまほしい。

わたしもよく授業で新聞の記事をとりあげるのですが、文学作品とちがってことばにリズムのないことが多いのは物足りません。かといって、外国語教育では文学を扱えと主張しているわけでは決してなく、わたしの考えはむしろその反対です。もちろん日常語を教えねばならないのですが、ただ、日常語でも、いい日常語はリズムが感じられる、ことばの命とつながったものであるはず。話しことばにせよ書きことばにせよ、そうしたものとして言語をあつかうことが外国語教育において大事ではないかと思えます。

今日は東寺の終い弘法。東寺の縁で申しますと暦も冬至です。話があればこれ迷走しておりますうちに、はや短日も暮れ、鴉も宿へ戻りました。そろそろ終りにいたしますが、最後に長年勤め

てきたこの立命館という職場について一言話さないことには幕が下ろせません。

わたしは立命館を理想的な大学と思っている、わけでは決してありません。しかし、優れたところも間違いなく多いわけで、そのなかから二つだけ美点を挙げたい。一つは、学内で議論を自由におこなう風が他にくらべて強いこと。ここにいるとあたりまえようですが、世間一般がそうというわけでは決してない。本学からよそへ移った方が、立命とおなじ調子で教授会で発言したら、席が途端にシーンとしたという話を聞いたことがあります。虎の尾を踏むようなことをよく言うと、まわりから驚かれたのでしょうか。本学のこういう自由な雰囲気はぜひ無くさないでいただきたい。

二つ目は、学生への誤った温情主義がないということです。他大学でよく聞くのは、卒業を前にして外国語の単位を取り残した学生のために、ゼミの先生などからなんとかしてやってくれと頼まれるということですが、わたしは36年間勤めて、そんな干渉はついで一度も受けたことがありませんでした。この学内の気風は実に立派だと思えます。

こうした職場でフランス語教育に、100%とは言いませんが、まあ80%打ちこむことができたのは人生の幸せと言うべきで、この幸せをあたえてくれた職場、学生諸君にわたしは最後に礼を言いたいと思います。わたしの「幕切れのせりふ」は、こうです。Merci！

〔追記〕話をすませたあとで、わたしには同じ題名でまったく別の話ができそうな気がしてきた。しかし、ことの性質上、大きく書きかえるわけにもいかない。

この文章は当日の録音テープから起したものではない。また、当日の草稿にも実際には話から省かれたところがあるが、この文章は草稿をもとにしつつ、すこしばかり筆を加えた。